OS-11「仕掛学」

オーガナイザ：松村　真宏（大阪大学）
山根　承子（近畿大学）

1. 本セッションの紹介

オーガナイズドセッション「仕掛学」は，大会1日目の午後に富山市民プラザ2階のギャラリーAで開催された．仕掛学とは，オーガナイザの松村真宏先生（大阪大学）によって提唱されたもので，「仕掛け」によって人の意識や行動を変化させ，社会的課題の解決を試みるものである．今回で3度目のオーガナイズドセッションとなる．会場には聴衆用に50席ほど座席が用意されていたが，立ち見が出るほどの盛況であった．

図1　会場の様子

2. 招　待　講　演

セッションの冒頭に招待講演として，片山めぐみ先生（札幌市立大学デザイン学部）に「移動とともに変化する出会いの期待感」と題して，動物園を訪れる観覧者が抱く動物との出会いの高揚感や，動物との共感を生み出すための仕掛けについてご講演いただいた．

本講演は，仕掛学の前身であった「フィールドマイニング」に深く関与している．フィールドマイニングとは，“見えているのに見ていない，聞こえているのに聞いていないフィールドの魅力に気付かせるための方法論”であり，そのアプローチとして仕掛けによって人の意識や行動を変えるものと定義される．

動物園の設計手法として欧米で注目されているのは，動物の生息環境を再現することで，観覧者と動物の距離を縮めるランドスケープイマージョンと呼ばれる仕掛けである．片山先生も動物園の観覧者が動物の世界へ没入できる方法論について研究されている．

動物との出会いの期待を高めるためには，高揚感が感じられる経路にすることが望ましい．片山先生はさまざまな実験を通して，どのような仕掛けが高揚感を高めるかを明らかにされている．例えば，動物園の経路で撮影した連続写真を映像化して実験参加者に提示し，ワクワクやドキドキを感じた箇所，反対に残念・がっかりと感じた箇所を記録させ，その結果から高揚感に影響を及ぼす要因を分析されている．

また，動物への共感を高めるために展示空間に施す仕掛けについても紹介していただいた．例えば，洞穴から息をひそめて観察するような動物の生息地を再現した仕掛けや，動物と知覚を共有できるように放養場の床の暖かさや匂い・音が感じられる仕掛けなどがあげられた．

なお，片山先生はご自身の研究が仕掛学であることをほかの研究者から示唆され，それが巡り巡って今回の機会につながった（そのため，片山先生と松村先生の面識は実はないそうだ）．「仕掛学」がよりメジャーな言葉になれば，今後もこのような形で，異分野の研究が「仕掛け」という共通の基盤でつながっていく可能性が期待される．

3. 一　般　発　表

本年は，ワークショップ，ランドスケープ，アノテーション，マニュアルなどのデザイン，協調行為を促すアプリケーション，ゲーミフィケーションを取り入れたシステムの提案，など12件の発表が集まった．発表の様子はUSTREAMで中継され，twitter上でもハッシュタグを介して議論が行われた（`http://togetter.com/li/514457`参照）．

今年度も提唱者の松村先生はスタンフォード大学で在外研究中のため，海外からSkypeを経由しての発表となった．松村先生からは，海外でShikakeologyを売り込む活動の様子とともに，これまでに集まった仕掛けを分類し，体系化した結果が報告された．

最後に，ラップアップとして花村周寛先生（大阪府立大学）から，「仕掛学は社会の問題に対してどのようなアプローチを取るかという議論を行う点で，デザインと相性が合うように感じる．また，仕掛けにも空間や時間といったスケールがあり，ヒエラルキーをつくったり整理したりすることで全体像が見えるのではないか」といったコメントをいただいた．

セッションの終了後には，会場近辺の居酒屋において懇親会が開かれた．多様な分野の研究者が集うのは仕掛学セッションの醍醐味である．富山の美味を楽しみながら深夜まで活発な議論が交わされた．

4. ま　と　め

仕掛学については興味をもたれた方には，ぜひ人工知能学会誌Vol. 28，No. 4（2013年7月号）の特集記事を参照していただきたい．また英文誌ジャーナル「AI & Society」においても特集が予定されている．

2年間にわたって海外からの参加となった松村先生は，本稿が掲載されている頃には帰国されているはずであり，今後も目が離せない展開になることは間違いない．

〔白水　菜々重（関西大学），山根　承子（近畿大学）〕